



コンテンポラリーダンサー 加賀谷 香

—語る身体、覚悟の背中—

日本のコンテンポラリーダンス界の第一線で活躍しているダンサー、加賀谷香。幼少の頃から数々の受賞歴を有し注目を集めていた彼女だが、30歳前後になるまでは、昼間はダンススタジオでレッスンを受け、夜はアルバイトという生活を送っていた。長らく続いた先の見えない状態、しかし踊り続けていくことに迷いを覚えたことは一度もないと言う。現在は都内のダンススタジオにて講師を務めるほか、振付・出演の仕事等によって生計を立てながら、ダンスカンパニー*Dance-SHAN*を主宰し、自分自身の創作活動を意欲的に行っている。

独りで立ったとえ同じ踊りを同じ環境で踊っていたとしても、ダンサーは最終的に「独り」だ。自分自身と対峙し、全ての責任を引き受ける。その責任感が、常人とは一線を画する強い存在感を生む。

「本当に良いものを教えられなくなった」

ダンス人口が増え続けている日本。しかし全体のレベルが上がってきているとは決して言えない。「誰でもやれる」発表の場が増えた結果、裾野ばかりが広がり、中核は全く育ってこないという状況が生まれてしまった。また、現在ダンス界の中核を担っている30～40代のダンサー・振付家達は、ダンススタジオでクラスを持ちつつも、自身の中心的なダンス活動は教えることとは全く別個で行っている場合も多い。先人に師事して学ぶことと第一線で活躍することが結びつかなくなってきてしまった時代。そのような中でなお加賀谷は、自身のカンパニー活動の際は基本的にクラスを受け続けている生徒を起用するなど、学ぶこととダンサーとして踊っていくことが繋がる方法を模索し続けている。

それでも近年「本当に良いものを教えられなくなった」のだと漏らす。ダンススタジオから現役のダンサーがいなくなり、趣味の人もダンスの道を志す人もレベルに関係なく入り乱れるようになってしまった今の状況下では、教える以前に様々な気を遣う必要が出てきてしまう。また本質を突いた瞬間、そのあまりの厳しさに、多くの人たちは離れていってしまうのだという。昔であればダンサーとして活動していくための道は非常に限られていたため、覚悟を決めその関門に向き合わないことには踊っていくことすらできなかった。しかし現在のようにいくらでも発表の場があると、簡単に脇へと逃げながら踊り続けることができってしまう。何かに強く揺り動かされることもなく、「片手間に」ファッション感覚で踊っていくことさえ可能だ。だが「踊りの世界のシビアさや専門性は、本当は何も変わっていない」と加賀谷は言う。「楽を好んで、レベルを下げたところで意気揚々と踊っていても、そこには何の生産性もない」。

ダンスへの敬服 「ダンスは、私なんかがどうこうできないほど大きくて絶対的な存在。私はその一端に関わっているに過ぎない。」ダンスが今自分に何を求めているか。加賀谷は自分に問いかけ続ける。



「システムや型ではなく、自分の言葉として紡ぐ」自分の身体で何ができるか外側から考えるのではなく、内なる想いや動機から表れ出した動きを緻密に紡いでいく…それが加賀谷の踊りだ。他の振付家の作品に出演する際も、まずはその振付家に寄り添い、外見的なフォームではなく動きを発する根源の部分を汲み取ろうと努める。意識と動きにズレがあることは許さない。とても時間がかかるミクロな作業から生まれたその踊りには、揺るぎない「真実」が宿っている。



「ダンサーは特別な人」加賀谷は振付自体・身体自体には捕らわれないが、それは決して無頓着ということではなく、むしろその逆だ。訓練された特殊な身体基盤があるからこそ、自由に語ることができる。その上に人それぞれの持ち味が滲み出る。そのような「語る身体」を作るために、クラスではシンプルで基礎的な部分を徹底的に訓練する。

アルバイトをしながら踊っていた頃も、ダンスが生業となった今も、踊りに対するスタンスは全く変わらない。「仕事と思ったこともない」……

若い頃から一貫してストイックに突き詰めてきた分、今は「突き詰まるというよりも、どんどん広がっていく感じ」だと言う。次々に遭遇する未知なることと、長年培ってきた自らの「語る身体」とを向き合わせることで、何が生まれるか。正誤・善悪を超えた領域での、決して終わることのない追求。そこに辛さはなく、むしろ「歳を重ねるごとに、ますます楽しく興味深くなっていく」。

「何とかして踊りでやっていくという強い気持ちさえあれば、自ずと道は開ける」……踊りとの関係も人との関係も希薄になってきている中、加賀谷香は変わらぬスタンスで、その説得力のある背中を後進のダンサーたちに示し続けている。



「結局は人と人との繋がり、それだけ」踊りの世界では技量以上に人との関係性が大事だと考える加賀谷は、カンパニー活動においても対話の時間を何より重んじる。リハーサル後のお酒の席で、作品の新たなアイデアが生まれることもある。